**シュリー・ラーマクリシュナを知る**

### 2017年3月19日

### シュリー・ラーマクリシュナ生誕祝賀会

### スワーミー・メーダサーナンダによる講話

### 於・逗子協会

「ラーマクリシュナとは誰か」を説明するのは難しいものです。もちろん、ラーマクリシュナは偉大な人物であり、偉大な聖者です。神の偉大な信者でもありますし、偉大なギャーニ、偉大なヨーギーでもあります。『ラーマクリシュナの福音』を執筆したマヘンドラナート・グプタ、通称「M」さんは、シュリー・ラーマクリシュナがどのような人か明らかにしたいと考えていました。が、やってはみたものの、結局は諦め、次のような美しい言葉を残しました。「無限の存在であるシュリー・ラーマクリシュナを解き明かすのは、とても難しい。」私達人間の知性は有限であり、無限のラーマクリシュナは人間の有限の知性を超えているから、人間の能力で捉えるには無理なのです。

皆さんの中には、「Mさんはシュリー・ラーマクリシュナの信者だから、このように言うのだ」と思う人もいるでしょう。そう思う方はぜひ、「ラーマクリシュナは誰か」を考え、どのような結論に達するかやってみてください。私やMさんが言うことを正しいものとして受け入れる必要はありません。皆さん自身が考え、追求して行くべきことなのです。いずれにしてもこのテーマは非常に興味をそそられます。考え始めたら「ハマる」可能性が大ですから気をつけてください。「ハマりたくない」という人は、初めから考えない方がいいですね。ラーマクリシュナは猛毒のコブラのようなもので、噛まれたら一巻の終わりです（笑）。普通のヘビに噛まれたら死にますが、シュリー・ラーマクリシュナというヘビに噛まれると不死になります。ここが大きな違いです。皆さん、有限の命でいるのと不死になるのと、どちらがいいですか。

シュリー・ラーマクリシュナをよく知るには、『福音』を研究するのが最も良いでしょう。この本は実際の言葉をそのまま記しており、説明ではありません。専門用語や解釈の必要もありません。シュリー・ラーマクリシュナが言ったことを直接「聞く」ことができます。『福音』を学ぶことは、神様と向き合って座るようなものです。瞑想も苦行も必要ありません。神様の前に座りたいと思うのなら、『福音』を単に「読む」のではなく「勉強」してください。読むだけでは表面的になってしまう可能性がありますが、勉強することで深く理解できます。

物語を読むのとは違います。物語のような本は、読んだらどこかにしまって、すぐに内容を忘れてしまいます。が、『福音』は忘れることはできません。勉強し始めた途端、じわじわと毒が回り始めます（笑）。そしてある日、毒にやられたのを感じるのです。そうなると、もう後戻りはできませんから、前に進むしかありません。『福音』に出てくる例え話や物語は、分かりやすくて面白いだけでなく非常に深い内容で、意識下に入り込み潜在意識に影響を与え続けます。そして人を変えるのです。『福音』を学び始めると、学ぶ以前とは違う人になります。変わったことに気付かないかもしれませんが、変化は必ず起こるのです。

ちょっとした例え話だが実は非常に深い、という例を挙げましょう。ご存知の通り、ヒンドゥ教徒は、神様は天国と呼ばれるはるか彼方に住んでいらっしゃるのではなく、私たちのハートの中にお住まいだと信じています。このようなごく近い所に、魂という形を取って神様はいらっしゃるのです。魂は、サンスクリットで「アートマン」と呼ばれます。こんなに近くなのに、なぜ神様は見えないのでしょうか。それは、「マーヤー」、すなわち霊的無知のせいです。マーヤーは英語で「illusion（幻惑）」と訳されることがありますが、この言葉は真の意味を十分に伝えていません。「spiritual ignorance（霊的無知）」や「mystic illusion（神秘的幻惑）」と言った方が良いでしょう。いずれにしても、このマーヤーのせいで、「最も近いものよりもっと近くに」あるものを私たちは認識できないのです。

このことについてシュリー・ラーマクリシュナは、『ラーマーヤナ』からの引用を例えにして美しく説明しています。王子ラーマは即位の直前、父であるダシャラタ王が以前に交わした約束を果たすために森に送られました。ラーマは、妻のシーターと弟のラクシュマナと共に、14年間王国から追放されたのです。森の中ではシーターを守らなければなりませんから、歩く時にはラーマが先頭に立ち、シーターが真ん中を、ラクシュマナが一番後ろを歩きました。シュリー・ラーマクリシュナはこの話を使って、私たちに神様が見えないのはマーヤーのせいだというイメージを説明したのです。先頭を行く神の化身ラーマが私たちのアートマン、最後尾のラクシュマナは肉体に入って人間になった魂ジヴァ、真ん中にいるシーターがマーヤーです。ラクシュマナにラーマが見えないのはシーターがいるから。私たちに内なるアートマンが見えないのはマーヤーがあるから、ということです。

『福音』を読むと、日常生活の出来事を題材にした素晴らしい例え話がたくさん用いられていることや、聖典の引用がほとんどないことに気付きます。日々の生活を基にしたこれらの例え話は大変分かりやすいと同時に、非常に深みがあります。実際のところ、『福音』を学べば学ぶほど自分の深みが増し、自分の深みが増すと『福音』の内容の深い意味をいっそう理解するようになります。

霊的実践は実際にやってみるといろいろな壁に突き当たるものですが、家住者にとっては特にそうだと言えます。「自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい」に代表されるように、聖典には「万人を愛せよ」という記述がありますが、このような言葉に戸惑う人もいるでしょう。「悪い人たちも愛すべきなのだろうか」という疑問が湧きますね。悪い人の中にも神様がいるのだから、悪い人も区別することなくつき合うべきなのでしょうか。シュリー・ラーマクリシュナはこれに対し、こうアドバイスしています。「噛んではいけないが、ヘビのようにシューシューと音を出して脅かしなさい」、すなわち、他者を傷つけてはいけないが自分が傷つけられないように脅かして自分を守るのです。

家住者としての生き方について例え話はたくさんありますが、問題は、私たちがそれを深く理解しようとしないことです。たとえば、シュリー・ラーマクリシュナは「水に浮かぶボートのように世間を生きなさい」と言いました。ボートは水の上にあるから浮かぶのですが、水がボートの中に入ってきたらどうなるでしょうか。同様に、世俗に生きることは何も悪くないのですが、世俗を自分の中に入れてはいけないのです。水の上にあるボートと水の中にあるボートは違います。この考え方は、実践してみると難しいのが分かります。人生や、家族との生活を楽しんでください。ただ、「これも消える」のだということを常に忘れずにいてください。時折、私たちはこう考えます。「毎日を今日のように過ごしていけばいい。問題のない、快適な人生だ。こうやっていけばいいんだ。」

ビジョイ・クリシュナ・ゴースワミーという有名な聖者が、よくこう言っていました。「今日という日も消えゆく。」あらゆることを楽しんでいいのです。ただし、「今日という日も消える」のだということを忘れてはいけません。良い日も消え、悪い日も消えます。今生も消えます。解脱し自由を得るまでは、そうなのです。ヒンドゥ教では「解脱」が理想であり、解脱とは天国に行くことではありません。もちろん地獄に行くことでもありませんが。解脱するまで、私たちの「生」は続くとされています。ですから、解脱の時が来るまで「これも消える」のだということを忘れずにいましょう。そうすれば、無執着でいられます。今生も、この家族も、若さも、年老いたことも、ヴェーダーンタ協会も、ラーマクリシュナ・ミッションも、仏教も、日本も、男としての生涯も、女としての生涯も、サラリーマンの生活も、定年退職の生活も、すべてはやがて消えるのです。ただ一つのことだけが真実です。解脱し神と合一すること、真理との合一。これだけです。